「新しい戦前」と「軍拡を許さない女たちの会」

田中優子

一 「あの戦前」と、数々の戦争

「新しい戦前」を私たちはどう迎えるべきか。ここではそれを考えたい。とりわけ女性たちにとって、今とこれからの日本は、経験したことのない社会状況なのである。

「あの戦前」は、どういう時代だったのだろう。まずそこから振り返る。「戦前」はどこを範囲とするか？

私は明治維新から敗戦まで、としている。同じ価値観によって動いていたからである。明治維新は市民革命ではなかった。幕藩体制を構成していた藩と藩が離合集散しながら、最終的に薩摩と長州がイギリスからの武器供与を受けて徳川家を倒した、という権力闘争であった。さらに、長いあいだ権力を持たなかった「象徴としての」天皇を、幕府を倒すために表に出して全国をまとめる役割に位置づけた。西欧と肩を並べようと、「帝国の皇帝」に似せた。その結果、日本は「天皇制国家」となった。

たなか　ゆうこ
1952年生まれ
法政大学名誉教授・前総長
江戸東京研究センター特任教授
著書:『江戸の想像力』(ちくま学芸文庫、1992年)
『江戸百夢』(ちくま文庫、2012年)、『カムイ伝講義』(小学館、2008年)
『江戸から見ると1・2』(青土社、2020年)
『苦海・浄土・日本一石牟礼道子もだえ神の精神』(集英社新書、2020年)
『遊廓と日本人』(講談社現代新書、2021年)

明治憲法では、軍事的な統帥権を持つ元首は天皇であり、天皇の名のもとで戦争が次々と起こったのである。

開国は幕府によって行われた。ペリー来航後の一八五四年から、江戸幕府は日米、日英、日露、日蘭の和親条約を次々と結び、一八五八年には幕府が米、英、露、蘭、仏の五カ国と修好条約を結んだのである。開国を拒絶して「攘夷」を掲げたのは水戸藩を中心とする複数の藩であって、その真意は徳川家に対する権力闘争だった。

一八六八年に明治元年になった。この年にさっそく戊辰戦争が始まる。同じ年、新政権樹立の通告と国際関係の樹立を求める国書を持つ使者を、朝鮮国に送った。しかし鎖国政策をとっていた朝鮮国は、複数回に渡って国書の受け取りを拒否した。このことが征韓論につながる。一八七〇年、イギリス式に海軍を整え、フランス式に陸軍を整える。一八七一年には日清修好条規を結び、一八七三年には徴兵令が布告される。さっそく戦争準備だ。一八七六年には、前年の江華島事件を経て日朝修好条規が締結される。そして一八七九年に琉球処分である。東アジアを中国の華夷秩序から解き放とうという意図は理解できるが、結局、西欧諸国のアジア支配のもくろみの中に入り込み、アジア支配を自らの目的としたのである。

ちなみに華夷秩序とは、中国の周辺国が中国皇帝の臣下たる「王」になることで、他国の侵略から守ってもらうための安全保障条約である。朝鮮王国、琉球王国はその朝貢国であった。日本はこの時期、朝鮮と琉球を中国から解放し、西欧による植民地化から守るという大義を掲げ、アジア諸国の支配に取り掛かる。日本自身が不平等条約を乗り越えて近代国家になろうとしている時に、中国、朝鮮、琉球に、同じような近代国家になることを強いたのであった。いかなる国際関係を持つかは、それぞれの国の問題であり、開国は各々の速度でおこなえば良いことである。そう考えていくと、徳川政権を倒した薩長にとって、明治維新は戦国時代と同じく、天下をとったら次は海外侵略、という「支配」の発想だったのではないか。明治維新はこのように、自由に向かう輝かしい「近代化」などではなく、権力闘争だったのである。したがって戦争を続けるしかない。

一八九四～九五年に日清戦争が起こる。朝鮮半島を巡る戦いである。一九〇四～〇五年に日露戦争が起こる。これも朝鮮半島を巡る戦いであった。そして日本は一九一〇年に韓国を併合する。同じ年に「大逆事件」で一二